

二〇二五年五月

通巻
161号

沼津市 史料館 通信 明治



水野出羽守手造りの赤茶碗「鳳凰」

当館蔵

箱書は表千家10世吸江斎（宗左、1818～60）、追箱は13世即中斎（宗左、1901～79）の手になる。吸江斎は「水野羽州侯手造 赤 鳳凰と号 宗左（花押）」と書いている。沼津藩の初代藩主・老中水野忠友（出羽守、1731～1802）は、政友である田沼意次らとともに江戸千家流の祖川上不白の門人になった大名の一人。そのため、沼津藩には天明5年（1785）に召し抱えられた川上不義（宗訓）をはじめ、川上梅翁（不白・物々斎）・川上滑白といった不白門下らが複数仕えることとなった（根津美術館『特別展 江戸の茶の湯』）。慶応3年（1867）時点の藩士名簿にも、御茶道として川上不義の名があり、水野家中として代々続いた家があったことがわかる。

沼津郡政役所の人びと

静岡藩時代の沼津には、沼津兵学校だけでなく、領民支配のための農政・収税・司法・警察・交通といった分野の仕事を行う役所が置かれていた。

移封早々の、駿河府中藩と呼称した時期には、領内を一〇二万石程度（村数では三〇ほどか）に細分する形で、駿河国を二〇、遠江国・三河国を二八の管轄区域に分割し、各区に地方役所を設置し、それぞれに地方役・地方添役・地方役下役・地方役下役並という担当者を配置した。駿東郡・富士郡の場合、九つの区域に分けられ、駿東郡松長村の元荻野山中藩陣屋や八幡村（現清水町）の元旗本陣屋、神山村（現御殿場市）の名主宅などが地方役所として転用された（拙稿「駿河府中藩の地方役所と旗本陣屋の転用」『静岡県近代史研究』第四六号）。

ところが明治二年（一八六九）八月から九月にかけて、政府の指示により藩では大きな組織改革が実施され、それにともない地方役所は廃止され、代わって郡政役所という民政を業務とする役所が領内に置かれることとなった。沼津・静岡・島田・掛川・中泉・浜松・赤坂の七か所である。

沼津郡政役所は、明治二年一月八日に中沢田村の地方役所（元田中藩の代官岡田氏宅）から沼津城下に移転し、正式には一月一日に開庁した

（『沼津史料』）。逆に言えば、それまでは沼津中心部には民政のための官衙は置かれておらず、中沢田村に置かれた地方役所が全体を管轄していたのである。沼津郡政役所は、沼津城の大手門外にあった元沼津藩の勘定所・郡方役所を転用したと考えられ、明治三年（一八七〇）頃に木版・色刷で発行された「沼津略画図」にも記載されている（『沼津市史 別編 絵図集』）。

「静岡藩御役人附 中」（明治二年九月）には、郡政役所発足時の役人の名前が列記されている。沼津郡政役所は権少参事石川周二（潮叟）がトップで、その下に郡方改役村山五三郎、郡方鈴木孫四郎・浅野安太郎・甘利八郎三郎、郡方並根立栄・木村樾藏・前島平十郎、筆生芥川賢二郎（宗孝）・神山周平（行寿）・進野規一（得造）といった陣容である。石川は普請役・勘定、鈴木は支配勘定出役・勘定、甘利は評定所留役・関東郡代組頭・信州中之条代官・越後出雲崎代官、木村は関東取締



石川千代松
『明治聖代教育家銘鑑』所載

出役、前島は勘定吟味方改役並出役、進野は飛騨郡代手附といった具合に（『県令集覧』『会計便覧』等）、多くが幕府時代には勘定奉行の配下で民政関係の仕事を行ってきた経験者であった。

それまでの地方役所は廃止されたはずではあるが、石川・鈴木の息子たちの回想録・伝記では、八幡村・松長村から沼津に転居したという形跡はなく、住居としてはそのまま使用され続けたのではないかと考えられる。なお、三年二月に郡政役所は郡方役所と改称した。

民政担当の文官としての履歴を持つ郡政役所勤務の人々は、洋学者や軍人から構成された沼津兵学校の人脈とはあまり重ならないが、幕末維新期に特有の現象として、彼らのような吏僚ですら洋学・軍事へ接近する傾向が一部で見られた。

たとえば、先に名前が出た中では、石川周二の息子千代松（後の理学博士）は、英語を沼津兵学校教授乙骨太郎乙や三谷某に学んだ（『石川千代松全集4 老科学者の手記』）。鈴木孫四郎の長男龍六・三男経勲は横浜語学所でフランス語を学び、龍六と次男釗平は幕府陸軍の士官となった（拙稿「旧幕臣鈴木氏と松長カトリック教会について」『沼津市博物館紀要』12）。甘利八郎三郎（八右衛門・為徳、後に静岡郡政役所の郡方に転出）の長男後知（徳太郎）と次男謙次郎（後青沼家を継ぐ）は、ともに別手組に入り、戊辰戦争では北関東・会津・箱館の各地を転戦、やがて後知は開拓使仮学校や参謀本部測量課などに勤務した（『徳川脱藩人事典』、『敗者の日本史17 箱館戦争と榎本武揚』）。

令和6年度新収資料の紹介

昨年度、明治史料館に仲間入りした資料です。

購入	小野 隆 様 足立恵美子 様 原井 慈鳳 様 山内 正明 様 勝呂 六実 様 掛川市	中石田小野家関係資料 足立春島関係資料 江原素六書軸 駿河国絵図 『日本真景富士之巻』天・地 沼津海軍工廠鉄兜 沼津海軍工廠防毒面 佐久間信英写真 千人針・日章旗（寄せ書き） 三枝基旧蔵江原素六関係資料	購入	法 中川将行関『初等平面幾何学』前巻 田付直男編『兵要地誌大日本之部巻之二十六信濃国誌』 島田三郎書簡 石橋純彦著『徳川吉宗公の暦学』・『烽火灯台の濫觴』・『石橋式標準時晷儀検定並に其据付法』・『日晷儀』 井口省吾・山口圭蔵・崎山元吉共訳『独逸基本戦術応用ノ部』後編 映画「沼津兵学校」チラシ 桑山俵四郎著『日光東照宮旧祭典略図』 沼津藩関係 水野忠武画双幅「鴛鴦」 水野謙斎画幅「三童子」 沼津藩士手島氏旧蔵鎧一式 その他沼津の歴史関係 沼津御用邸関係資料 「沼津町全図」（明治40年）「日用三光路計記」（沼津宿関係資料）
	江原素六関係 「麻布中学校第二十五回卒業記念写真帖」「江原教育基金募集後援大音楽会プログラム」 沼津兵学校・旧幕臣関係 塚本明毅撰『再刊筆算訓蒙』一・二・三巻 乙骨太郎乙自筆草稿「被雷之			

令和6年度当館収蔵資料の利用

明治史料館の資料が様々なところで活躍しました。

☆展示使用

6月～11月	沼津市芹沢光治良記念館 企画展『人間の運命』の舞台を旅する」 写真「牛臥 三島館」
6月～7年2月	静岡県富士山世界遺産センター 企画展「ぐるり富士山たびめぐり」 鳥瞰図「富士を背景とせる沼津三島」
6月～12月	谷口吉郎・吉生記念金沢建築館 第9回企画展 パネル展示 写真「上本通り（昭和30年頃）」
7月	横浜開港資料館 日米和親条約170周年記念特別展「外国奉行と神奈川奉行」 パネル展示「重豊履歴画」（荒川重平関係資料）など
7月	沼津市 第77回沼津夏まつり 台湾企画展 写真「飯田豊二」
9月～10月	下田市 下田開港170周年記念事業日露歴史パネル展「プチャーチンと下田～交流の記録～」 パネル展示 写真「嘉永七年甲寅歳 地震之記」
11月～	米山梅吉記念館 常設展 パネル展示 写真「江原素六」「沼津中学校校舎」「西周」
11月～7年5月	台湾糖業博物館 「鈴木藤三郎（顕彰）特別展」 パネル展示 写真「飯田豊二」
7年1月～3月	埼玉県立嵐山史跡の博物館 企画展「城ってなんだ」 パネル展示「北条家印判状」（井田高田家文書）
7年1月	森町文化会館 「静岡県と台湾展」 パネル展示 写真「飯田豊二」
7年2月	小山作之助生誕160周年記念事業実行委員会 「小山作之助生誕160周年記念フェスタ」 パネル展示 書簡「小山作之助から箕輪焉三郎あて」（旧幕臣箕輪家資料）

☆刊行物掲載

6月	『沼津史談 第75号』 沼津郷土史研究談話会 「沼津市中心地商店会社案内図」
8月	『絵物語ぬまづ昔ばなし第9巻 「平作地蔵」』 e-monogatari 写真「浄瑠璃本 伊賀越道中双六 六ツ口の切 沼津里の段」
10月	『学研の図鑑LIVE地球 新版』付録DVD 株式会社Gakken 宝永大噴火絵図「夜の景気」（データ・個人蔵）
7年3月	『市川市史 第2巻 歴史編II ムラとマチ』 市川市 写真「江原素六」（江原素六関係文書）

☆テレビ・WEBサイト等

6月	S K I P シンティ彩の国ビジュアルプラザHPおよびYouTube「荻野吟子、再発見」写真「荒川重平」
8月, 7年2月	高校演劇サマーフェスティバル シアター1010 静岡県立三島南高等学校上演作品『語り継ぐこと』 写真「空襲後の市街写真（北東側）」（スクリーン投影）
10月	沼津市ふるさと納税返礼品Blu-ray 「ラブライブ！サンシャイン!! Aqoursと発見！ぬまづの歴史アドベンチャー!!」 写真「江原素六」「水野忠敬」「江原牧場碑」「沼津略画図」など
12月	N H K 「ぐるっと！」映像「狩野川での体操」「ボートこぎ」など（小澤春子氏寄贈）
7年1月	静岡朝日テレビ「とびっきり！しずおか土曜版」 写真「さようなら沼津港線」「昭和初期の沼津駅周辺」など

休館のお知らせ

臨時休館 くん蒸のため、次のとおり休館します。
令和7年6月19日(休)～6月30日(月)

長期休館 屋根等修繕のため、次のとおり休館します。
令和7年7月21日(月)～令和8年2月28日(出)（予定）



沼津市明治史料館通信

第161号

令和7年5月31日

編集・発行 沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂372-1
TEL 055-923-3335
FAX 055-925-3018
印刷 みどり美術印刷株式会社

拙稿「大鳥圭介製造の活字をめぐる諸史料」（『沼津市博物館紀要』49、2025年3月発行）に関して、訂正すべき箇所があったため、この場を借りて記載させていただく。江川家主宰の縄武館の塾生となっていた、高松・会津・川越・米沢の諸藩士たちが、江川配下の長沢らに宛てた金銭受取証のことである。拙稿では、活字製造（あるいは活字を使用した書籍刊行）のための経費を塾生たちが江川家に貸し付けており、それを江川家側が返済した際の受取証であると解釈した。しかし、むしろ、活字製造を行っている職人山本勘右衛門に対し支払うべき経費を江川家が支出した際、縄武館の塾生（諸藩士、特に塾頭の任にあった者）たちがそれを山本に手渡すことを担当していたため、その金銭を一時的に預かった時に提出した、江川家側への預かり証であると解釈したほうがよかったかもしれないと考え直した。すなわち、諸藩士は、活字製造経費を江川家に貸し付けていたわけではなく、単に江川家が支出する経費を職人側に手渡す役割を担っていたということである。（樋口雄彦）